

道 どうひょう 標

d o h y o

年間特集「ふしぎ」

第二回・弥勒の世 大倉源次郎さん

連載

あなたのいのちの物語 あなただけではない

伝承を科学する 能楽における「祝言」

道しるべ 四天王寺の西門

2022 春季号



年間特集

「ふし」

第二回

大倉源次郎さん

弥勒の世



新年を寿ぐ能楽「翁」

釈迦入滅後五六億七千万年後に生まれるアルカディア『弥勒世界』はあまりにも遠い。せめて「南無阿弥陀仏」と唱えて阿弥陀様の元へ往こうと、念仏を唱えた頃、即ち平均寿命四十歳ほどの鎌倉〜戦国時代に能楽は大成し大変な人気を得ました。もとより人間は弱いものです。何かに縋り生きているのは現代人がコ

ナ禍の今、ワクチンに縋ることと変わりません。

新年には必ず上演される能にして能にあらずと伝わる能楽『翁』。老人がニッコリと微笑んだ翁面を納めた箱を先頭に、精進齋を済ました生身の役者が二十数名登場し着座するや大自然の風水の奏でる音楽として、風の音の笛が吹き、波の音として小鼓が打ち出し、陰陽が生まれ

ます。

呪文の様な「とうとうたりたりたらら〜」と大夫の謡が始まり、露払いの若い男が舞う間に件の『翁面』を大夫は舞台上で掛け流すことで未来を象徴する『翁』そのものに成る。

そこで「天下泰平・国土安穩」を祝い、来るべき素晴らしい未来を寿ぎ予祝する。

虚構の舞台の上だからこそ実現可能な未来を祝う『翁』は天地人の三才を祝う舞を、舞い納めると静かに翁面を外して舞台を去る。

すると労働者の代表ともいえる『三番叟』が現れて『大地踏』に続く『種まき』と『豊作』を予祝して『翁』が終了する。

国の根幹事業であった農業が無事に収穫を迎えることは翌年、翌々年の生活が保証される一番大切な当時の人々の関心事で、お金も大切ですが物々交換経済と貨幣経済を併立させていた日本の経済体系は、何でもかんでも貨幣経済に置き換える現代の

価値観に一矢報いる価値があると思います。

現物の食料、お米が如何に大切かを思い起こす上でこの翁の上演は必須事項であり、舞台は虚構だからこそ出来る理想の未来を上演するのが『予祝』の世界。それに向かって「今年も一年、豊作を目指して頑張ろう！」と心も新たに向かう結団式でも有ったと言えるのです。

江戸時代中頃には能楽の一日の正式の演目は、この翁に続き神々の能が上演され、八百万の神々に護られている世界が繰り広げられるのです。



左：翁面のモデルになったと伝わる奈良県桜井市多武峯談山神社『麻陀羅神面』

右：奈良県桜井市纏向古墳出土『木製仮面』

天下泰平・国土安穩を祝う

大和の国は言霊の幸わう国

次に演じられる『狂言』ではこれだけ未来を寿ぎ、神々に護られているにも関わらず愚かにも失敗を繰り返す人の営みが演じられてお客様から明るく笑いが起きます。

ここからは主に過去の人々の物語。これまでの迷いの人々を諭したり、なだめたり、丁寧に弔い成仏させるのは仏様のお役目。それでも成仏しない鬼になった者共には修験道の行者様達がよってたかつて折伏した歴史エピソードはなんと200曲以上現存しているのです。

聖徳太子そして弥勒

今年わが国に仏教を取り入れ「和を以て貴し」と唱えた聖徳太子千四百年。仏教伝来と共に様々な外来文化が大和に流入した当時は、部族間の宗教抗争が繰り返された時代でもあります。

縄文数万年と言われる先住民の元へ様々な文化、民族が流入し混乱をきたした時代に、もうこれ以上争うのは止めよう、協力しあって良い国を作ろうと神仏習合をして興福寺と平城宮を一緒に創建したのが710年

なのです。

この一大事業の成功の記録が当時最新の万葉仮名で書かれた713年の『古事記』。世界に発信したのが720年、当時の世界共通語の漢文で書かれた『日本書紀』なのです。ここで忘れてはならないのが天皇から読み人知らずまでの四千五百首、二十巻にも及ぶ大歌集『万葉集』です。大事業の裏でかき消されがちな生の『心の声』を残したのです。

この神話の時代の素戔嗚尊の歌から続く『和歌の道』は、現代も皇居の新年歌会始に続き、紛れもない日本の伝統の柱と言えます。

この柱から枝葉として詩歌、和歌文学が生まれ、果実として能楽、歌舞伎、文楽が生まれてくるのです。この楽しみを続けること自体が日本の文化でありましたが、残念なことに欧米化する日本では

過去の古いものとして敬遠されてしまいました。

能の『翁』は男性の老人がにっこりと微笑んでいます。片や200曲を超える能楽の最高秘曲として重く扱われる老女を主役にした『関寺小町』は七夕の星祭りの日に短冊に願いを込めて遊ぶ楽しみを、お坊様のとりなしで老婆と子供が共に遊び、ひと時の幸せを共有する能なのです。

この藝能を創りあげ七百年に及び楽

しみ続けているこの国の文化を、世界の人々は『不思議』と思わないはずはありません。

もう一つ、大和四座の大夫家には本面としてオリジナルの翁面が伝承されています。観世宗家は弥勒作、そして金春宗家は聖徳太子作であります。

『不思議』といえば仏と神と人が助け合う国。それを、実現した言霊の幸わう日本をもう一度見直したいと考えています。

大倉源次郎（おおくらげんじろう）

能楽小鼓方大倉流十六世宗家（公社）

能楽協会理事

1957年 大倉流十五世宗家・

1981年 甲南大学卒業 大倉長十郎次男（大阪生）

1985年 宗家継承

2017年 重要無形文化財保持者

（人間国宝）各個認定

著作制作

2009年 能楽DVD

「大和秦曲抄」制作

2017年 大倉源次郎能楽談義（淡交社）

2019年 フランスL.V財団より招聘

を受けシャルロット・ペリ

アン・展覧会能楽公演制作

2021年『能より紐解く日本史』（扶桑社）



（苅田蒔絵小鼓胴：江戸初期）

鼓の胴に描かれた蒔絵の画題にこれは何と思うものがあります。これは刈り取った後の稲株です。最高の絵の具である金蒔絵でこの絵を描いた先人たちの思いに心を寄せると当時の人の生活が見えて来ます。

「あなただけではない」

浜田 廣介

『明るいろうそく』

「おかあさんがありました」と始められている。夫に死なれ、貧しいながらひとりの子どもを大切に育てていた。「この子さえ、大きくなってくれたなら」と思わない日はない。そう思うたび、貧しさも苦しきも忘れることができた。

ところが、その子が重いはしかにかかってしまう。夜には菜たね油にひたされた燈心から頼りない光が照らすだけだ。顔色は青ざめ、唇はかわいていく子どもを抱いて、夫の位牌の横の小さな観音さまの像の前にひざまずき、「どうぞ、この子をお助けくださいませ」と祈ると、涙がほろりと落ちる。しかし、祈りも空しく明け方には子どもは息を引き取った。

近所の人たちが集まって棺をつくり、お骨となった子どもはお寺の墓にうずめられた。けれども幻にありありと子どもの姿が浮かび目を

ふさいでしまう。観音さまが夢に現れ、おかあさんを慰める。「どうすることもできないのだと、よくかさんがえて、あきらめなくてはならないよ」と。だが、目がさめると、また朝が来たことがうらめしい。死んでしまいたいと思う。

見るに見かねた観音さまはお釈迦さまを訪ね、どうすればあの親に元氣を出させてやれるでしょうか、と問いかける。お釈迦さまは「私が言つて聞かそう」といい、翌日、貧しいお坊さんの姿でおかあさんの家にやってくる。おかあさんは「会えるものならもういちど会いたい」という。お坊さんは「先祖の位牌がないという、おうちがあるかもありません。そこから、すこしあぶらしてもらつていらつしやい。それをもらして、お子さんを生きかえらせてあげましょう」という。

お母さんは喜んで、あらゆる人に聞いて回る。夜まで歩き回ったが、位牌がないといううちは一軒もなかった。「どうしましたか。ありませんか。」「どういうものか、一けんもみつかりません。あした、また、きてみてください。おほうさま。」坊

さんは身のかたちをただし、いっばいに涙をうかべるお母さんに目をまっすぐに向けた。「よく聞きなさい。生きるよと死ぬとは、どこのいえにもあるのだよ。子どもに死なれるおやたちは、ほかにもたくさんいるのだよ。自分にばかり、そのかなしみがあるとは思うな、不幸をうらむな。まよな。なげくな。子どもたちのためには、げんきをだしてはたらいて、あの世の福をいつも祈つてやるのだよ。」



すると、坊さんの足の下から、金の蓮の台が現れ、からだから金の後光がさしてきた。お母さんは肝をつぶして地にからだを伏せ、

「なむあみだぶつ、なむあみだぶつ……」と唱え続け、顔をあげるともうそこに坊さんの姿はなく、たとえようもない、不思議な香りがしていた。お母さんはいそいそ家の中に入り、仏壇に短い一寸くらいの古ろうそくを灯す。それしかなかったのだ。しかし、そのろうそくの光はこうこうと部屋の隅まで明るく照らしていた。

仏教の初期の説話（「長老尼偈」のキサーゴターミーの逸話）を二千年以上も隔てた日本の生活環境に引き寄せ、やさしく語り直している。このような恵みもたらす明るいろうそくは、現代の日本ではどのように灯されるのだろうか。それを示す物語は広く求められており、形をかえて見出されていくはずだ。

島園進（しまどのすすむ）

1948年生れ。東京大学教授を経て、現在、上智大学大学院クリーファア研究所所長、著書に、『神聖天皇のゆくえ』（2019年5月）『明治大帝の誕生——帝都の国家神道化』（2019年5月、春秋社）、『ともに悲嘆を生きる』（2019年4月、朝日新聞出版）、『いのちをつくつて、もいいますか』（2016年、NHK出版）、『宗教を物語でほどく』（2016年、NHK出版）がある。

伝承を科学

する

能楽における「祝言」

祝言は、現在ではあまり聞かれな
い言葉だが、能楽においては現役の
言葉である。能楽の番組の最後に
付祝言と記されることがある。「千
秋楽は民を撫で、万歳楽には命を
延ぶ」(高砂)、「君を守りの神は
千代まで、栄ふる御代とぞなりに
ける」(岩船)など、国土や人民、
それを治める君主の安泰と永続を
祈願し祝福する歌詞を、舞台上に並
ぶ地謡(合唱隊)が番組の締めと
して歌う。これが付祝言である。

付祝言は、じつは省略形である。
昔は一日の番組が終わると、まずパ
トロンから、一座の主演者に褒美が
下賜された。それに対する返礼(い
わばアンコール)として、治世や君
主の祝福をテーマとする作品が演じ
られた。これが本来の祝言のかたち
だった。

付祝言という言葉や習慣が生ま
れたのは江戸時代だろうが、祝言
という言葉自体は室町時代から、
能楽の大切な用語であった。

祝言は、文字通り「祝いの言葉」
を意味した。室町時代の能の大成

者、世阿弥は、祝言の模範例を示
している。代表のひとつが「足引の
山下水も絶えず、浜の真砂の数積
もりぬれば、今は飛鳥川の瀬になる
恨も聞えず、さざれ石の巖となる喜
びのみぞあるべき、然れば天に浮か
める浪の二滴の露より起り、山河草
木恵みに富みて、国土安静の当代也」
〔音曲口伝〕である。国土の発
展と繁栄が、様々な自然現象のた
とえを使って歌われている。

祝言(祝いの言葉)には、それ
を歌うにふさわしい発声法があつ
た。世阿弥は、歌う声を亡憶と祝
言とに大きく分類する。亡憶の声
が、律(高音)の声、悲しむ声、
気を緩やかに持ち、柔らかく、弱
さを表現する声であるのに対して、
祝言の声は、呂(低音)の声、喜
ぶ声、気合をこめて前面に出してい
く強い声である〔音曲口伝〕。現
在の謡には、強吟と呼ばれる発声
法がある。強く息を出し、音階を
意識せず、言葉の抑揚に似た上行
下行によって旋律をつくる発声法で
ある。強吟は、祝言の声を正統に

引き継いだ発声法であろう。

さらに祝言(祝いの言葉)には、
それに似つかわしい風体(姿、キャ
ラクター)があつた。世阿弥はその
代表として老人をあげる。老人は、
平安と永続の象徴である。他に、
動物では鶴や亀が、植物では松や
梅が、祝言の風体である。長寿で
生命力が際立っているからである。
これらの存在は、祝いの言葉の代わ
りにもなる。つまりその風体自体
が、祝言なのである。



江戸時代の小謡本『随一小謡繪抄』の巻頭にある「高砂相生嶋台」の図。能高砂前場のジオラマが、婚礼をことほぐ祝言の風体となる。

能楽の歴史を通して、祝言の代
表曲は(高砂)である。主役は、
落ち葉を掃き清める尉と姥。二人
は、高砂の松と住吉の松が合体し
た相生の松を賛美する。そして、
常緑の松は、和歌に歌われること
を通して、天下泰平の象徴となる
と物語る。尉と姥と、相生の松と
の組み合わせは、婚礼の席に飾られ
る島台にも造形されて、史上最強
の祝言の風体となった(図参照)。
ちなみに能楽の舞台において、松を
賛美することは、徳川の本名であ
る松平を祝福することにもなった。
そう考えると、能舞台の背後に必
ず描かれている松の姿は、パトロンた
る幕府に向けられた、祝言の風体
であると見えてくる。

藤田隆則(ふじた・たかのり)

一九六一年、山口県生まれ。京都市立
芸術大学日本伝統音楽研究センター教
授。研究対象は、能・声明などの中世
芸能および音曲。著書に『能のノリと
地拍子』など。現在は、日本の伝統音
楽を次世代に伝えるための応用的研究
に従事。

四天王寺の西門

聖徳太子建立の大阪四天王寺の西門には、「大日本仏法最初四天王寺」

の石碑と、大きな石の鳥居が建てられている。お寺に鳥居と思われるかも知れないが、明治初期までの神仏習合の名残などというが、神聖な領域への入り口をあらわすシンボルとされている。この石の鳥居には額が掲げられ「釈迦如来・転法輪処・当極楽土・東門中心」(此処は釈尊の説法の地であり、極楽の東門の中心に当たると)と記されている。

平安時代の中頃から、阿弥陀仏の極楽浄土への信仰が盛んとなり、この西門が『観無量寿経』に説かれた往生行の一つである「日想観」の霊場として注目されるようになった。石の鳥居は東へ向かえば「日本仏法最初の霊場四天王寺」の入り口であり、西へ向かうと「西方極楽浄土の東門」である。現世の安穩と後生の安樂を

願うものには、この上ない霊場といわねばならない。

この地には「夕陽丘」の地名があるように、古来、夕日をめでる名所であった。古い時代は西門から西は洋々と大阪湾がひろがっていた。古代の寺院は真南を向いて建立される。したがって西門は真西となる。とくに春秋彼岸の中日は、太陽が真東から昇り真西に入る。「日想観」は真西に沈む太陽を通して光り輝く阿弥陀仏の浄土をイメージする観察行である。誰にもできる行ではない。しかし、その日に天王寺の西門に参って、真西に沈む夕日を拝み、先人も行き自身も生まれたい極楽に願いを込めた。

今も多くの人が彼岸には天王寺へ詣つている。ただ、西に向かつて手を合わせる人は見かけられることはない。視線は天王寺の伽藍へなのか、参道にならぶ露店なのか、現代人は自分が死ぬ身であることを忘れたのだろうか。

編集後記

現代の日本人は明治からの文明開化、近代化ですっかり昔の日本人とは違うものとなってしまった。古来の人間は自然の力を頼って生きていた。日が照らなければ作物は育たないし、雨が降らなければ作物は枯れ、自分たちの飲み水も困る。そこで畏怖を込めて神の存在を想い、地や山、川、海、森にもそれぞれ精霊が宿っており、大自然で起きる現象はすべて神や精霊の働きによると考えた。そして神を怒らせると暴風雨や大地震が起きると信じていた。そこに宗教や芸能が生まれ現在に至っている。生者と死者、神と仏が共に暮らす日本の風土とその文化。日本という「くに」はその基盤の上に成り立っている。でも誰しもそれは遠い昔のことと思っている。

今世界は疫病、天変地異で苦しんでいる。「翁」は微笑みながら「天下泰平、国土安穩」を祈り、願うという。我々の「くに」に受け継がれてきた「楽しみ」そして「不思議」。その霊妙な働き、御力に我々は今一度、耳を傾ける必要があるのではないか。大倉先生からの密かな警鐘として大事に受け止めたい。 合掌

表紙の絵 散華

散華とは仏や菩薩に対して蓮華を散らして荘厳するものである。現在の蓮弁形(宗派によっていろいろ違う)の紙に絵が描かれるようになったのは新しく、大正十年の聖徳太子千三百年忌に始まったと思われる。

今回の三点だが、椿は蓮弁と形が似ており年中、蓮弁のない時期でも葉があり、それが散華として使われていた。東大寺お水取りに椿花の造花がつくられるのはそのためで、元々仏教の花との縁はない。あと二つの「数珠掛け桜」と「八房の梅」は新潟の梅護寺(本願寺派)にある。親鸞聖人の遺徳を讃えるために珍種の植物などが「越後の七不思議」として象徴化されてきたが、梅護寺は真宗道場の格を今に残した稀有な寺であると思っている。

畠中光享(はたなか こうきよ)

日本画家/インド美術研究家
真宗大谷派僧侶

仏壇仏具のことは
お気軽にお問い合わせ下さい

株式会社 廣瀬佛壇店

☎0120-81-7065 ☎06-6771-7007

ホームページ <http://nttj.itp.ne.jp/0667717007/> (詳細地図有り)
〒543-0062 大阪市天王寺区逢坂2丁目1-12
(四天王寺西門交差点 西へ30m)